

一九七七年以前出土の木簡(三)

奈良・平城宮跡(第二二次)

1	所在地	奈良市佐紀町
2	調査期間	一九六四年(昭39)一一月~一九六五年三月
3	発掘機関	奈良国立文化財研究所
4	調査担当者	樋本亀治郎
5	遺跡の種類	宮殿・官衙遺跡
6	遺跡の年代	奈良時代~平安時代初期
7	遺跡及び木簡出土遺構の概要	

平城宮跡第二二次調査は、推定第二二次内裏外郭の東に接する部分で行った。発掘面積は六三〇〇m²におよぶ。調査地区は、内裏外郭の東面築地回廊の東から、関野貞『平城京及大内裏考』以来平城宮跡の東限と考えられていた地点までのところにある。検出した遺構は、内裏外郭をめぐる築地SA七〇五及びその東側で北から南に流れれる玉石組の溝SD二七〇〇と、それによつて東西に区分される

掘立柱建物群である。築地SA七〇五以西の建物群は内裏外郭内にあつて、内裏の運営に密接な関係を有する官衙に所属するものと思われ、SD二七〇〇以東の建物は、それとは異なる官衙に属するものと考えられる。これらの遺構のうち木簡が出土したのはSD二七〇〇とこれにそぞく凝灰岩石積みの溝SD二〇〇〇とである。

SD二七〇〇は全長三五mにわたつて検出し、縁幅一・六m、深さ一・五mの規模をもち、側壁は径三〇cm内外の玉石を七段に積みあげている。この溝は一九二八年と一九三二年に、奈良県技師岸熊吉氏が二二次発掘区の北方で検出した溝につながり、宮城東部における基幹の排水溝である。岸熊吉氏は二ヶ年、両度にわたつてこの溝を四ヶ所検出し、いずれも玉石組の護岸施設をもつものであることを確認している。出土した遺物は瓦、土器の他、木製下駄、櫛、漆塗曲物、和同開珎、神功開宝、万年通宝、帶金具、鏡破片及び墨書き器で、墨書き器のうち判読できるものは「内掃」「膳」「□内省」「省」「守」「□」「三」の他、「此椀私家/持往人之」「宮」と記したものがある。また一九八一年春には奈良国立文化財研究所が、この溝の

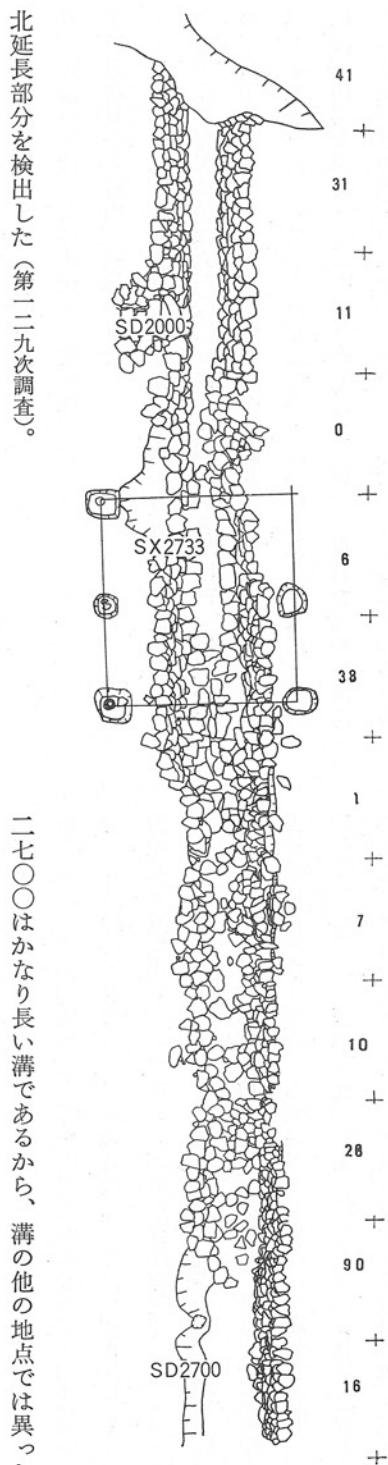


図1 SD2700 木筒出土状況図
(数字は3mごとの点数)

北延長部分を検出した(第一二九次調査)。

第二次調査でSD二七〇〇から出土した木筒は総数二九〇点で

あるが、これらの木筒は図2にみられるように、溝の各層にわたって出土している。溝内の埋土はおづかみには六層にわけられ、第II層を除いて、すべての層から木筒が出土している。各層から出土した木筒にみえる紀年銘の年代順位は溝内の土層の上下の順位と一致し、出土した年紀のある木筒によって、ほぼその堆積の絶対年代を推定することができた。この溝の最下層(第VI層)からは天平初年の年紀のある木筒が出土し、この溝の埋土の堆積の始まる時期を示している。また溝全体をおおう最上層からは延暦の年紀のある木筒が出土し、この溝の最終の埋没年代を示している。したがって、SD二七〇〇は古くは天平初年頃から漸次年代をとつて堆積がすすみ、延暦年間に全体が埋没したものと考えられる。もちろん、SD

二七〇〇はかなり長い溝であるから、溝の他の地点では異った堆積が予想される。

木筒に伴出した遺物としては、和同開珎、万年通宝、神功開宝、施釉陶器、陶硯、土馬、木製容器、檜扇、箸などがあり、墨書き器としては「宮内天長節」「斎会」「犬母比人」「少允」「宮」「序」「膳」「内省」「大炊」等の記載のあるものがある。

SD二七〇〇は、内裏内郭からはじまってSD二七〇〇にそそぐ溝で、内裏内郭をかぎる築地回廊を暗渠でぐりぬけ、次第に深さを増して、築地SA七〇五のところでは再び暗渠となっている。SA七〇五をぐるところでは深さ一・三mとなり、側面は下部を凝灰岩の切石積とし、その上にさらに大きな玉石を積みたしている。この溝からは、SD二七〇〇に注ぎこむところで木筒一点が出土している。

8 木簡の釈文・内容

三〇一

〔解請〕
宮内省 請 宮内

(1) .
□
□
□
□
□倉
□七
□か
よ

絵

(74)×(18)×3 081 一一一六号

二十一
溝

(1) 「民部省召
贊士師佐美万呂
波多足山

多称

宋女司力

(3)

(4) 「木工寮解」申請□×

『木工寮』

(5) 「一岡田王三□□王」

6)

豎子所六人奴

飯運一人

子石
□万呂女

」 (700)×44×7 011 110九九号

61

(14) 「讚岐國〔那珂郡カ〕□□調塙一斗 (173)×(17)×9 019 一一八五号

(15) 「▽美作國勝田郡塩湯郷米五斗▽」

162×(16)×4 032 一一八六号

「昭和39年度平城宮跡発掘調査概要」(『奈良国立文化財研究所年報一九六五』) 一九六五年
横山浩一
工芸善通
奈良國立文
化財研究所
研究年報一九六五)

田中 琢
「昭和39年度平城宮調査出土の木簡」(同右)

『平城宮跡昭和39年発掘調査概報』 一九六五年

一九七四・五年

『平城宮木簡』

一九六五年

『平城宮跡出土木簡概報』 一九七四年

一九七四年

『平城宮木簡』

一九七四年

『平城宮遺構及遺物の調査報告』(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第十二冊』)

一九三四年

『第一回平城宮遺構遺物調査報告』(同右第十三冊)

一九三五年

以上のSD2700出土の木簡の内容として注目される」とは、宮内省、木工寮、采女司など宮内省に関係する記載があることなどが注目される。前者については、墨書き土器に「□内省」と記されているものがあること、また岸熊吉氏の調査で「内掃」、「□内省」と記されたものがあつてそれぞれ内掃部司や宮内省を示しているものであることと一致している。こ

のような木簡の記載内容の特徴は、内裏の東北に接する官衙の性格を示唆しているかもしない。

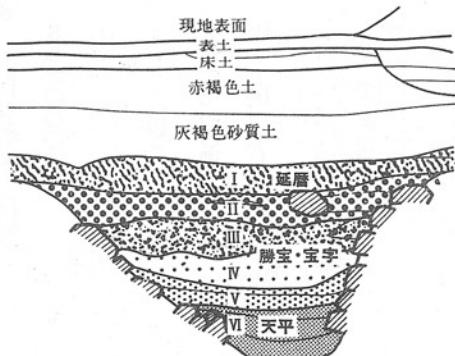
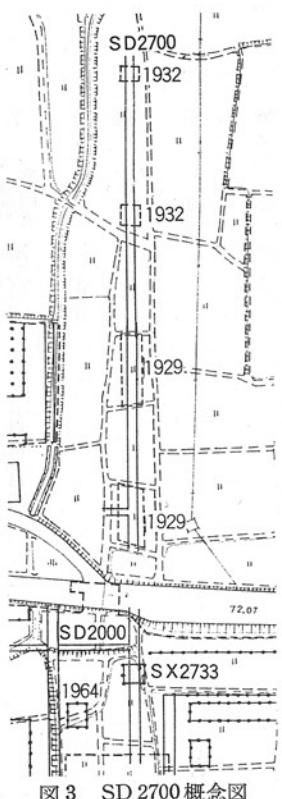


図2 SD 2700北壁土層図

9 関係文献



(鬼頭清明)